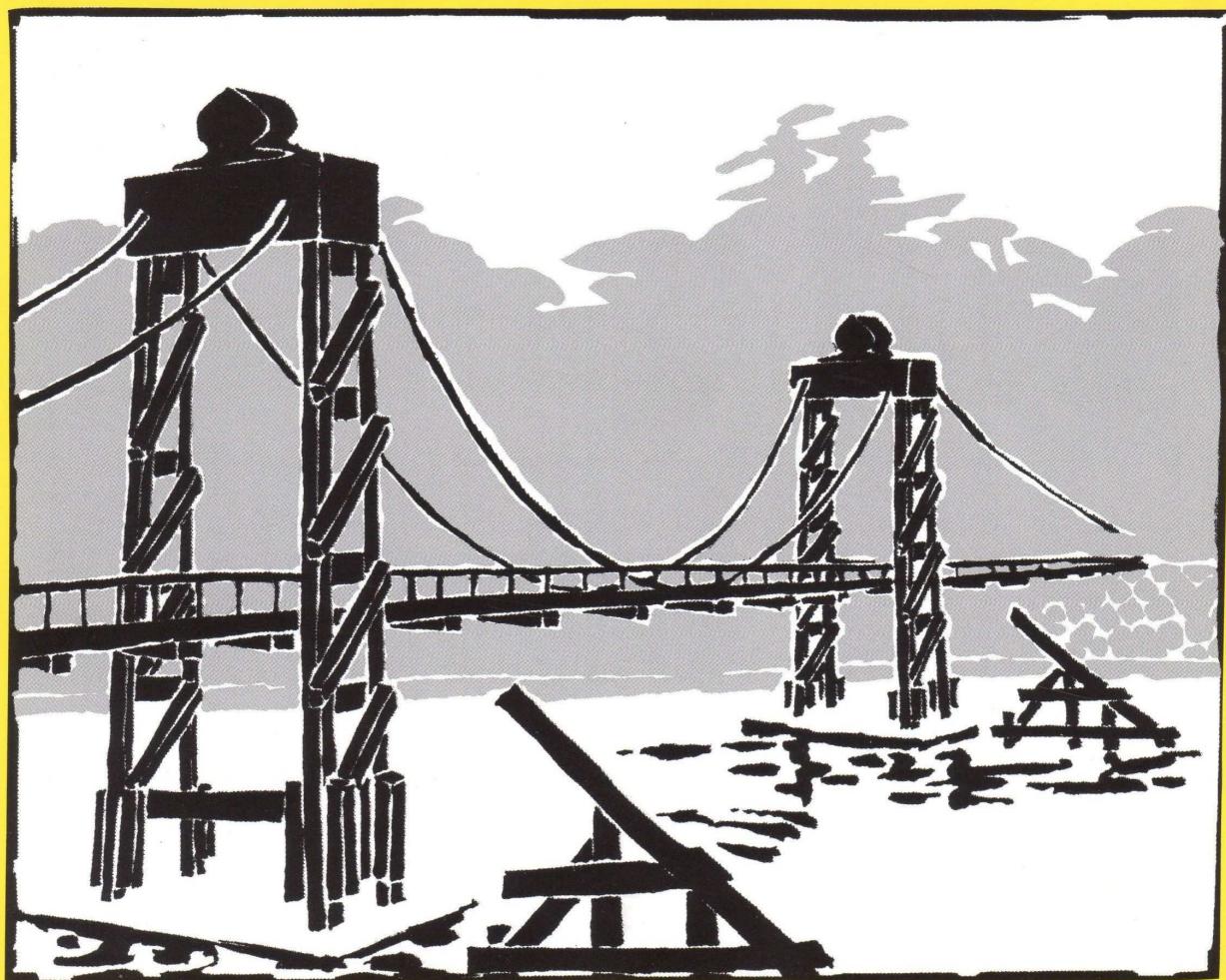


毘沙門

第47号



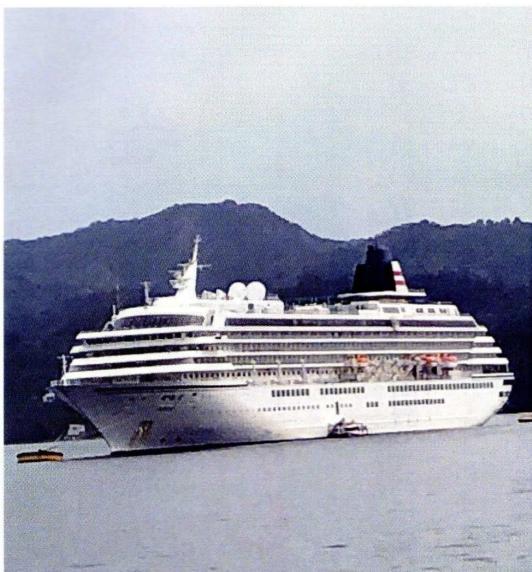
(一社)盛岡市歯科医師会

2022

会員寄稿

世界自然遺産「小笠原諸島」・
激戦の地「硫黄島」クルーズ体験記

菊月圭吾



写真①

コロナ禍の直前、2019年11月、クルーズ船「飛鳥II」での世界自然遺産「小笠原諸島」周遊ツアーに参加した。（写真①）

今回の航海は、スペシャルゲストとして、日本のエースとして5度のオリンピック経験を持ち、東京オリンピック出場にも内定している飛込競技選手の寺内健さん、ミ Yun-hen Oniんピック金メダリスト南将之を父に持つ、自身もバルセロナバレー・ボーラーの南克幸さんの講演会も企画されていて、ますます興味深い。

横浜からを目指す小笠原諸島「父島」までは約1000kmの距離があり、空港がないため、交通手段は船のみである。週1便の定期船で向かうのが主流だが、今回は「飛鳥IIクルーズツアー」を選択した。「飛鳥II」は、全長241m全幅29.6m、乗客定員872名、乗組員420名、9

5日（月曜日）終日航海



写真②

階建ての日本では最大の大型客船である。到着まで24時間、のんびりゆつくり優雅に過ごそうと考えていた。8時にはフルコースのウエルカムディナーを堪能した。

大島、三宅島、八丈島を通過し、海面から99メートルほど頭を突き出している奇岩「そう婦岩」など、たくさんの名所を船上から見学。（写真②）船内では美味しい食事や豪華なショーや、講演会などで楽しんだ。夕食では、たまたま寺内選手と隣り合わせになり、東京オリンピックでのメダル獲得を期待しての記念撮影に応じていただいた。その後のオリンピック

11月4日（日曜日）午後5時横浜港出港

出港後最初の名所、絶景ポイントである横浜ブリッジの通過と迫力を楽しんだ後、寄港地レクチャーで小笠原の自然や文化の説明やオプショナルツアーの紹介などがあり、旅の気分をより一層高めてくれた。牛肉・豚肉・鶏肉と並んで小笠原では当たり前の「亀肉」や、歴史上一度も大陸と地続きになつたことのない海

洋島ならではの固有種の宝庫などの説明に期待は高まる。スタッフはみんな笑顔、細やかなサービスを感じられる。



ク見学抽選では、寺内選手が出場する飛込競技が全く偶然に当たり、身近で応援できることを本当に楽しみにしていたのだが。（写真③）



写真③

6日（火曜日）朝8時「父島」に上陸

父島には大きな客船が着岸できる岸壁がないため、飛鳥Ⅱは湾内のブイに係留して、地元の漁船に乗り込んでの上陸である。

小笠原諸島は、2011年6月29日、

自然が持つ価値が改めて認められ、屋久島、白神山地、知床に続く国内4件目の「ユネスコの世界自然遺産」に登録された。太古の海底火山噴火によってできた海洋島であるため、海を渡つて生物相が到達することができず、植物の40%、昆虫の30%、貝類の95%が小笠原独特の固有種で、「進化の実験場」ともいわれている。到着後、予約していたプライベートオ

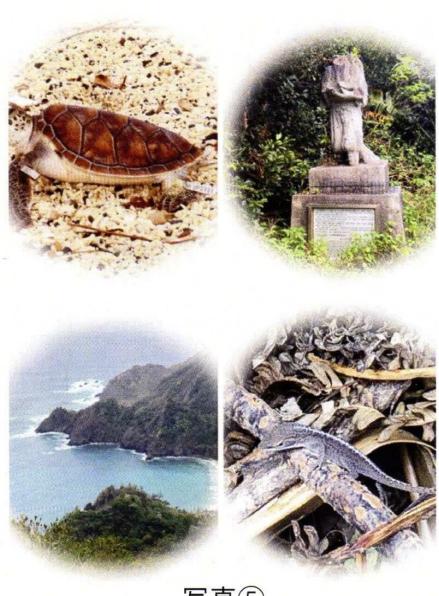


写真④

普ショナルツアーパーに参加した。（写真④）森林生態系保護地域で、タコノキ・マルハチ・オガサワラビロウなどの固有植物や、オガサワラトカゲ・カタマイマイ・アカガラシカラスバトなどの固有動物と触れ合い、亜熱帯の自然を楽しんだ。さらに日本軍が使用していたトラック、地下壕や大砲の砲台などの軍事関連の残骸が放置されたままの第二次世界大戦の戦跡も見学した。ウミガメの産卵で有名なコペペ海岸や、魚雷を受けて座礁した沈船が眠る境浦など、小笠原ならではの景勝地も忘れられない。（写真⑤）岩手県奥州市、鹿児島、石垣島、そして父島の4か所に設置されている直径2300kmの電波望遠鏡も見学した。4局で同時に観測すると、月面上の1円玉を判別できる精度らしい。（写真⑥）



写真⑥



写真⑤

ランチは、昭和レトロな雰囲気が懐かしい「波食波食（ばくばく）食堂」で、島料理の正統派「海亀の刺身」をショウガ醤油で賞味した。マグロの赤身と肉の中間ぐらいの触感でとても美味しい。臭みもなく、やや弾力があつて、やわらかい。一時は絶滅を危惧されたアオウミガメは、現在年間135頭だけに捕獲制限されており、どんどん個体数が増えて来ている。世界でも珍しい島として注目されているらしい。ビールや島はちみつ梅ドリンクとともに、亀の煮込みや島魚の刺身、島野菜のチャンプルなど島素材の名物を堪能した。（写真⑦）

午後には、父島の南沖合に浮かぶほとんどの上陸できない南島海域公園をボート観光することもできた。



写真⑦

栗林中将始め20000人を超える日本人が戦死した第二次世界大戦の激戦地として知られ、今なお帰島がかなわず、歴史に翻弄され続ける硫黄島は、現在海上自衛隊と航空自衛隊の基地があり、400人余りの隊員が駐屯し、民間人の上陸はできない。周遊ツアーもほとんどないので、千載一遇のチャンスが訪れた。南に向かう10時間近いクルーズだが、夕食後、バーで一杯やり、あとは爆睡するのみ。朝が待ち遠しかった。

7日（水曜日）「硫黄島」到着



写真⑧

ほどなくして、クルーズ船にとつては問題にならない台風なので、父島からさらに200km南にある「硫黄島」周遊にむかうとの朗報が、船長からアナウンスされた。

栗林中将始め20000人を超える日本人が戦死した第二次世界大戦の激戦地として知られ、今なお帰島がかなわず、歴史に翻弄され続ける硫黄島は、現在海上自衛隊と航空自衛隊の基地があり、400人余りの隊員が駐屯し、民間人の上陸はできない。周遊ツアーもほとんどないので、千載一遇のチャンスが訪れた。南に向かう10時間近いクルーズだが、夕食後、バーで一杯やり、あとは爆睡するのみ。朝が待ち遠しかった。

数か月前に海底火山「福德岡ノ場」が大噴火し、そこから漂流した軽石の被害がしばしばメディアで報道されたが、そこから50kmの近距離にある硫黄島は活発な火山活動による隆起が激しいため港を作れないし、島内には回収が全くできていらない無数の地雷不発弾が残っていて、大戦中の大砲や戦車の残骸、地下壕跡など数多くの戦跡がある。さらに島の地下には、硫黄島の戦いによる日本人戦没者13000柱を超える戦死者の遺骨が残っているとされる。そんな島に、朝方到着した。



写真⑨



写真⑩



写真⑪

船上では、硫黄島が母の故郷であると
いう地元ガイドさんの詳しい説明があり、
アメリカ軍が上陸した海岸や、日本軍の
防衛拠点として有名な摺鉢山、座礁した
船の残骸などを間近から見学できた。（写
真⑧）航空自衛隊の飛行機がひつきりな
しに発着していたが、近辺警備のためだ
ろうか。ピュリツァー賞（写真部門）を
受賞した「硫黄島の星条旗」が繰り返し
頭の中を巡った。（写真⑨）

戦争で荒廃してしまった硫黄島だが、
現在では緑の木々も回復し、島の自然は
着実に甦っていて、周遊中、たくさんの
シロハラミズナギドリがクルーズ船の周
りを飛び回り、目を楽しませてくれた。（写

真⑩）さらに、絶滅危惧種シマハヤブサ
の生息地で、頂上部分だけが海上に見え
る火山島の「北硫黄島」も周遊し、台風
襲来がもたらした、もう一度と味わえな
い貴重な体験をすることができた。

8日（木曜日）終日航海

帰りの航海では、朝からビールを飲み
ながら三食を平らげ、日中はオリエンピッ
ク選手の講演会で興味深い体験談に耳を
傾け、小笠原古謡歌やさよならパーティ
も堪能した。（写真⑪）アホウドリの数少
ない繁殖地で生息地の、天然保護区域「伊
豆鳥島」も見学した。ほんのわずかだが、
イルカの回遊を目にした。天気も良かつ

たので、くみ上げた海水を使用した船上
プールで泳ぐこともできた。

9日（金曜日）朝9時横浜港到着